

第3表 苗木の葉内成分(乾物%)

試験区	樹種	成 分	スギ			ヒノキ		
			全窒素	磷酸	加里	全窒素	磷酸	加里
A	ソイラック	10	2.09	0.28	1.10	2.03	0.18	1.28
B	〃	15	1.95	0.34	1.28	1.95	0.34	1.21
C	〃	30	1.64	0.40	1.28	1.58	0.32	1.22
D	フミゾール	15	1.80	0.34	1.26	1.96	0.24	1.20
E	〃	25	1.66	0.32	1.39	1.98	0.34	1.20
F	〃	50	1.76	0.30	1.19	1.74	0.28	1.05
G	テルナイト	15	1.56	0.24	1.14	1.71	0.50	1.10
H	〃	25	1.82	0.18	1.16	1.77	0.42	1.27
I	〃	50	1.62	0.20	1.07	1.64	0.46	1.18
J	オガクズ堆肥		1.45	0.18	1.35	1.58	0.60	1.27
K	V S 堆肥		1.71	0.22	1.38	1.76	0.58	1.37
L	慣用堆肥		1.68	0.32	1.41	1.82	0.50	1.34
M	無改良剤、無堆肥		1.73	0.24	1.32	1.78	0.30	1.24
N	無改、無堆、無肥		1.55	0.15	1.16	1.76	0.20	1.09

34. アカシア造林地に関する考察(第1報)

(アカシアモリシマについて)

福岡県林業試験場 育 城 巧

1. ま え が き

早期育成林業の一貫として、1951年頃より福岡県下にアカシアモリシマの造林が実施されてから12~13年を経過した。

其の間造林面積は年々拡大されるとともに、造林初期のものは既に伐採されてパルプ、又は杭木として利用されてきた。

しかし、導入樹種だけに県下に於ける適応性、或いは樹種の特徴がただちに把握出来なかつた為に造林上の被害もまぬがれなかつた。特に、亜熱帯を原産地とするアカシアモリシマは、造林地の寒害が可成りひどくあらわれた。中でも1959年、及び1963年の寒害は福岡

県全域にわたつた。

筆者は、この2回に寒害の概況調査を行なつたのでその結果から福岡県に於けるアカシアモリシマの造林可能域を考察してみた。

2. 調 査 方 法

(1) 1959年

県下268ヶ所の造林地について海拔高別に現地調査を行ない被害状況を次のとおりに分けた。

(i) 無 害 地 寒害を全然受けていないか。又は僅かに寒害の徴候がみられるが回復の見込みがある造林地。

第1表 気 候 区

気 候 区	行 政 区
① 北西沿岸地域	糸島郡、早良郡、筑紫郡、粕屋郡、宗像郡、福岡市
② 北九州都市近郊地域	遠賀郡、北九州市
③ 北九州山岳地域	平尾台、福智山塊
④ 背振山地域	背振山塊
⑤ 筑豊炭田地域	嘉穂郡、鞍手郡、田川市、直方市、飯塚市、山田市
⑥ 英彦山地域	英彦山、馬見山、吉野山塊
⑦ 南部山岳地域	水纏山、御前岳、三河山塊
⑧ 筑後川中流地域	浮石郡、朝倉郡、三井郡、甘木市
⑨ 筑後平野地域	大牟田市、柳川市、筑後市、久留米市、八女市
⑩ 豊前地域	京郡郡、築上郡、行橋市、豊前市
⑪ 宝満山地域	宝満山塊

(e) 全枯損地 全立木が枯損又は完全枯損でなくても回復の見込みがない造林地。

(f) 半被害地 (i)(e)の中間型で無害木と枯損木の両者がみられる造林地。

(2) 1963年

(i) 福岡県を11の気候区①に分け、そのうちの6気候区について各気候区ごとに被害状況を調査した。

(e) 被害造林地は、全林分の30%以上枯損した造林地とした。

(f) 造林可能地域は、被害率20%以下の地域とした。

なお、各気候区、及び行政区は第1表のとおりである。

3. 調査結果及び考察

(1) 海拔高と寒害

県下に於ける造林地は、海拔5~700mの間に分布しており、同造林地を50m間隔に区分して寒害状況をまとめた結果第2表を得た。

第2表 海拔高と寒害 1959年

種別 海拔高(m)	調査数	無害地		半被害地		全枯損地	
		造林地数	百分率	造林地数	百分率	造林地数	百分率
1~50	112	106	94	3	2	3	2
51~100	59	44	74	9	15	6	10
101~150	34	8	23	11	32	15	44
151~200	21	1	4	5	23	15	71
201~250	21	—	—	2	9	19	90
251~300	5	—	—	—	—	5	100
301~350	6	—	—	—	—	6	100
351~400	5	—	—	—	—	5	100
401~450	1	—	—	—	—	1	100
451~500	2	—	—	—	—	2	100
501~550	—	—	—	—	—	1	100
551~600	1	—	—	—	—	—	—
601~650	—	—	—	—	—	1	100
651~700	1	—	—	—	—	—	—

第2表より、先づ造林地が海拔200mを越えると無害地はみられず、250m以上では半被害地もなく全造林地が枯損していることが分る。又海拔100~200mの間に於ても被害地の占める率が非常に多く大半が寒害を受けている。造林地が100m未満になると被害地も少なく全体のおよそ90%は寒害を受けていない。

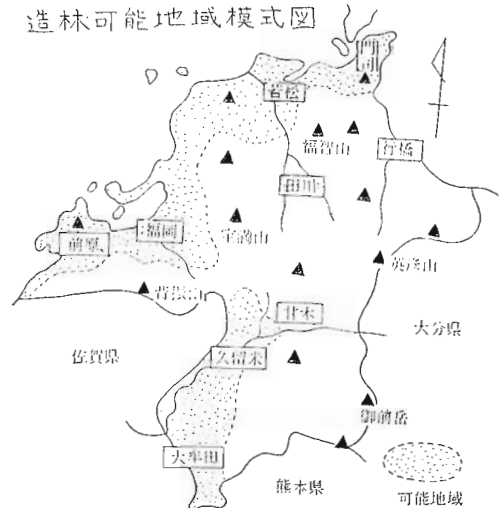
この結査から、福岡県に於けるアカシアモリシマの造林は、先づ海拔100m附近以下の地域としてそれ以

第3表 気候区別寒害状況 1963年

気候区	調査数	寒害数	百分率
① 北西沿岸地域	129	11	8.53
② 北九州都市近効地域	14	2	14.29
⑤ 筑豊炭田地域	33	13	30.30
⑧ 筑後川中流地域	6	4	66.67
⑨ 筑後平野地域	19	1	5.26
⑩ 豊前地域	21	10	47.62

(1) 福岡県の気候 福岡県経済部 (1951)

造林可能地域模式図



上の地域は今のところ警戒すべきである。

(2) 気候区と寒害

気候区11のうち6気候区について調査を行なった結果第3表のとおりとなった。

調査の結査から被害率20%以下は ①北西沿岸地域 ②北九州都市近効地域 ⑤筑後平野地域となり、この地域が一応造林可能地域と考えることが出来る。この地域は地理的にみた場合何れも県の北部より南西に走る海岸線、及び有明海に面した地域であり模式図に示すとおりになる。

なお今回は地理的に適応性を把握することを目的とし調査範囲を広くとった為細部にわたっては可成り検討を要するところもある。従って今後はさらに調査を細分化して検討を続ける必要がある。

参考文献

(1) 福岡県経済部;福岡県の気候 : (1951)